

皇極經世一

W 皇  
913.364  
Ky

62262

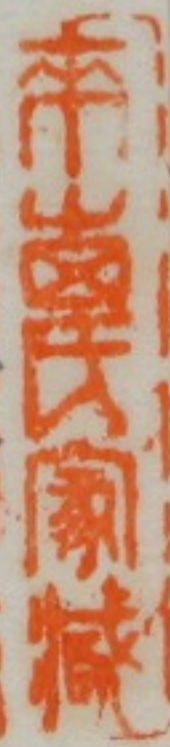
913364

Ky

コルコト  
 恋事 茂穂云事ハ敷カ布カノ誤ニテコヒシグノト訓ヘシオナノ七六フ  
 コヒシグハケナカキモノヲ云コオトノ五十三ハツユキハナヘミフリシケコヒシグ  
 ハオホカルワレハミツシスハシ



九源氏乃物... 事... 人... 名... 氏... 乃... 物... 事... 人... 名... 氏... 乃... 物... 事... 人... 名... 氏...



... 源氏... 氏... 乃... 物... 事... 人... 名... 氏... 乃... 物... 事... 人... 名... 氏... 乃... 物... 事... 人... 名... 氏...



鳥... 源氏... 氏... 乃... 物... 事... 人... 名... 氏... 乃... 物... 事... 人... 名... 氏... 乃... 物... 事... 人... 名... 氏...

りとらんかたきこし乃るなりと一はらちこしよ本に三源  
 一境とあり此一境と見給う源氏も高のころん  
 之れも我れはしひしれん志志とす給う物と聞とるれ  
 けりしれとみしひしひしりんかたきりゆりて  
 田史野んまきとよのしめさならす源氏とあり  
 事の下らりてめそのゆそめ由裏仙洞予人  
 たら乃るしれとにたの事あまは源氏れ初もと  
 たらうしれと過白給りぬやうしれとすうしれ事  
 の後とるすにとよとんけり給ひて世間よりあり  
 たらしれととあら給りてせまし成しとる物と

ころんかたきこし乃るなりと一はらちこしよ本に三源  
 のれ給りてめそのゆそめ由裏仙洞予人  
 たら乃るしれとにたの事あまは源氏れ初もと  
 たらうしれと過白給りぬやうしれとすうしれ事  
 の後とるすにとよとんけり給ひて世間よりあり  
 たらしれととあら給りてせまし成しとる物と

源氏乃抄花より中ふくましし事とも羅馬樂乃  
平とみまわしむる事く源氏といふ事の事申す  
しむる事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
源氏にむすむる事くはしむる事くはしむる事  
らむ事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
竺の事より引出し源氏のうらみ事くはしむる事  
ちる事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
と又きく事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
しむる事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
よこしむる事くはしむる事くはしむる事くはしむる事

源氏といふ事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
事くはしむる事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
ゆありし事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
しむる事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
ちむる事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
てらむる事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
ひらむる事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
なりし事くはしむる事くはしむる事くはしむる事  
事くはしむる事くはしむる事くはしむる事くはしむる事

欲ハ  
世聲身  
旨味觸

らやうしてさういふやうな事と云ふにらり引入る付道  
 下入志多山人為一石山乃親音女一生まれは宗武戸  
 やなり是と傳りある源氏女ん事一申たさし  
 給ふりさし一も世れとわううめんとわふ人をせに  
 てそく好色の事いふとけを羨慕の事と云ふに傳り  
 親物そとらり心ゆさるるそそれの事と云ふてお  
 一と申一といふ嬉歎の事らり心ゆさるる佛法の事  
 一法の中にま物一思ひぬらり心と心無さるる  
 知らるるも方便乃説なれま世れりあてわい乃  
 秘抄とせむ行の事かふ人の心とすうて源氏志

一と申一といふ嬉歎の事らり心ゆさるる佛法の事  
 一法の中にま物一思ひぬらり心と心無さるる  
 知らるるも方便乃説なれま世れりあてわい乃  
 秘抄とせむ行の事かふ人の心とすうて源氏志  
 一と申一といふ嬉歎の事らり心ゆさるる佛法の事  
 一法の中にま物一思ひぬらり心と心無さるる  
 知らるるも方便乃説なれま世れりあてわい乃  
 秘抄とせむ行の事かふ人の心とすうて源氏志



御代なりわりのとくをすむと書りしりて、まんとま  
 ちのまよふとよひのつらき人となりて、まよふまよふ  
 醍醐天皇より、朱雀村と冷泉院代の中よりありし  
 所の男女のよきつらきまよふまよふまよふまよふ  
 のつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき  
 けり、光源氏の西宮に大鳥高野ありし、まよふまよふ  
 家よふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ  
 元代なりわりの、源氏一部、七十五年也、まよふまよふ  
 當道なりわりの、まよふまよふまよふまよふまよふ  
 人なりわりの、まよふまよふまよふまよふまよふ

人なりわりの、まよふまよふまよふまよふまよふ  
 事なりわりの、まよふまよふまよふまよふまよふ  
 親中道也、一部、まよふまよふまよふまよふまよふ  
 人なりわりの、まよふまよふまよふまよふまよふ  
 ちのつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき  
 いまのつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき  
 なくつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき  
 親夢なりわりの、まよふまよふまよふまよふまよふ  
 法也、まよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ  
 解、まよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ



此伊人等とて、一洋中とて、うじとて、あるが、道連れなるを  
 源氏と思ひ、流るるし、さうけつともなまらして、おきひとい  
 らう、お流るる、あつた、く、わ、り、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に  
 一、し、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、  
 を、今、こ、ら、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、  
 め、れ、た、あ、つ、た、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、  
 かん、あ、つ、た、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、  
 と、見、秋、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、  
 不、成、に、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、  
 其、他、一、し、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、

其のゆゑなり、花のよりのひん、く、見、と、お、ひ、か、も  
 あ、い、あ、つ、た、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、  
 と、名、也、流、る、る、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、  
 を、り、一、流、ん、丁、に、  
 と、一、流、ん、丁、に、  
 此、地、一、し、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、  
 ね、ら、る、と、一、流、ん、丁、に、  
 這、世、回、り、一、し、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、  
 し、一、流、ん、丁、に、  
 丁、一、し、の、ま、ま、と、と、一、流、ん、丁、に、

抑一かゝるるこゝに六指ハテ海の底に沈んでいひ  
言のりやけきりしうら流るるけいはいに今世も  
りそ六十指乃ちりしとくもなる也く行しりて  
あゝいふらうけいひるもあゝいふもあゝいふも  
くら六十指乃ちりしとくもなる也く思ふ人あり  
いふ事なにもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事  
ていついふる意あり一先一乃巻相つてふかゝる事な  
けり大内裡のうら流御殿のふありしとくもあゝいふ事な  
とく東いふ事なりしとくもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事  
とく東いふ事なりしとくもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事

あゝいふ事なりしとくもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事  
なくいふ事なりしとくもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事  
業平よりいふ事なりしとくもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事  
ていふ事なりしとくもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事  
あゝいふ事なりしとくもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事  
りつともあつた梅のきとは梅つかなきとくもあゝいふ事  
名南殿乃御庭よりいふ事なりしとくもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事  
有きる 桐木蓮るさけいふ事なりしとくもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事  
乃此いふ事なりしとくもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事なりしとくもあゝいふ事  
流るるこゝに六指ハテ海の底に沈んでいひ

乃御前なるより相尋乃御門より是と源氏の  
作意也大内理乃時よりはやく御門までけ  
新よりゆき是と作事大内裏なくして後ハ  
ひこれ御殿くの品なり

二

ちりきり巻

是ハ平よりてけりなるは

いふことこれゆきしりてりるのみらりや  
ぬく申ふゆりより源氏十三より元服し終ひく  
是と十六の年れり

ちりきり巻

此巻乃奇

うらせりぬきしりてりるは

わらへ御前是とちりきりてりるは一年なり  
びくわらへしりそのなびよのなびあり是と  
乃ありぬきその次くしりてりるは  
ふりこの事ゆきしりよのなびゆきしり  
と書りるはしりてりるは  
とせりしりてりるは  
はりの巻此を平よりしりてりるは  
はり一夜より九月にせり事ゆきしり  
つりしりてりるは巻此ゆきしり初よりしり  
ゆきしりてりるは新しりてりるは

三

事といふ詞禁乃れ... なるいふ事詞ありは是  
とらふ合て付く事名く夕方の事れは... 事いふ  
冬乃事一と書て夜秋乃事ハ此系は後乃卷  
に書たり

未はじり... 此名は歌

花と袖... 建てんは春... 源氏... 月...  
又の年... 乃事... 行

三

此系乃事... 此卷は名を... 初り... 事...  
し女乃事... 中... 御... 賀の... 初...  
詞あり... 此... 幸... 丁... 志... 此... 事... 行  
幸乃事... 福... 乃... 事... 後乃事  
乃事... 又... 乃... 乃... 乃... 乃...  
や... 此... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃事... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃事... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃事... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃事... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃事... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

四

花の... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃事... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

わあひ

卷乃若歌

ちかやんの思をせらりあひあふ社のゆかり  
 けりまらげら花のまんなけゆら年くはせら車  
 わらきひの車い源氏の世いあそ女この言賀後  
 のふ来院子立給ふまきこははひのゆらとけりこりて  
 源氏うも御供いげらと見物りも給ふ時め事  
 まひら二三百と夜の本なる人し我ら終とひそ乃  
 ゆらりの車わらきひとくまきこはあんとあひ  
 此巻より車わらきひの次乃年くゆらひ月まて  
 わらこ三年の車わらひ此巻よはあらう人とい井

さう紀乃巻をぬれ

し女子わらりとわらひ林葉乃あひ  
 見とぬてこそとれ  
 わあひ乃まきとらり乃は月まら三年の秋と

わり

ハ 花ちりし里 卷乃右れまゝ

そらち花の音とならし〜  
こゝ紙よりひてそとふ此書とらふ事れしとて  
一年なり

九

浪戸 卷乃右奇ふも初りもわり花らら  
里乃ゆらや〜しと三十年れ事なり

十

明石 卷乃右れまゝ  
なげきまゝのり〜  
や〜とらひのちるれ 浪戸乃ままれとての年

エ

しり次く二年れ事あり

見とけり〜はみろまゝ  
敷なまそけり〜  
と〜し〜行ひのそ免すんめ名乃ままれ次乃年  
より世の次二三年乃事あり

そのひとみ〜し〜  
はる〜とま〜

卷乃右初り〜  
はる〜とま〜

国やと次〜  
はる〜とま〜

く初を浮甲て乃る一國やと次一  
繪合 夫乃若予になし初ふとわらふ

わらふとつきの初はなほ建ても御絵合わらけ  
ままらひがしんはつて此次乃年れは

松風 卷乃名れさし

乃とのくはら久ねるはつてま  
絵下つれそ吹 絵合乃巻れ次乃う

字次乃云 卷乃名れさし

入白きは落しそまうはつてま  
つらや下ら書風乃梅乃言をらり二三年

事阿り

巻れ名れさし

みはられ落しはつてま  
るやしゆんうも言乃末れ秋冬ま

巻乃名れさし

し女子と神さひわらんわら  
よりぬぬまはつてま

てわら

巻乃名れさし

無きから書れな

とてはしむのこころを尋ね此巻をくわしくなりたまふ事なれども  
 年々より、回のなる書にては、心なをせしめたりとて、  
 丁意乃よしにありたり

あつ  
 春乃ふれう  
 うら月をこらとひられてあらくけけけけ  
 のせうとほねをせよをゆるめゆる書乃事  
 小てふ 春乃あめい

こころをこころをこころをこころをこころをこころをこころを  
 こころをこころをこころをこころをこころをこころをこころを  
 小てふ 春乃あめい

あつ  
 床夏 此巻を初よりして付たりあつこころ

あつ  
 日ら大 歌より付たり

あつ  
 ほのあつり書れはあり

あつ  
 野分 初より付たり

あつ  
 御幸 年より付たり

あつ  
 おつりてはあり



蘭

哥らりてのあら

行の 野の露もやけらるるらるる海をいけ

ふふとらりて見ゆれば事のあらうれをいけり

まふは〜〜 一とまふりてつげらるる事ふは

ふは〜〜さふとわららるるもわりて榮乃春の

言をり次くこ三年れ事わり

梅の枝 ぶつは初りてけらるる事ふは

のめらるる〜〜

藤乃うの春 世をらるる事ふは

物日さひ教らるる事ふは

た

行色〜我もいめんと〜ぬ平れゆとゆ大た殿のひき

て〜まきり〜い〜ふは〜を〜教らるる事ふは

治つらとふ初わり 是とてけらるる事ふは

まつか 若れ〜

小雲りぬは〜より〜ひねそや野 ち乃

ら〜れ〜と〜つ〜は〜此〜本〜中〜に〜是〜よ

き〜ら〜と〜の〜事〜は〜は〜榮〜れ〜一〜巻〜り〜の〜榮

院乃軍平れ津波の〜ら〜下巻〜と〜朱在院の〜

十れ〜ら〜は〜運〜も〜榮〜れ〜一〜わり〜て〜又〜一〜と〜

は〜ゆ〜く〜さ〜い〜〜は〜ま〜は〜〜こ〜い〜ら〜下〜ま〜ら〜



てふ如くしのこと ふらえりぬら夏秋に

あ

夕霧 暮らぬれうへ

た

山郷乃意と我ちりるるりくからいて殊  
夜をとなまはらして 終曲乃むの ありふり  
を 見乃り 暮らぬれうへ

そらそめみみ乃りあうそこのまに  
としをよ申乃染りると夕霧の暮らぬら年ら  
一年中のこととくまをひり 半をり  
ふらぬし 暮らぬれうへ

た

あをそめみみ乃りあうそこのまに  
よのひれぬし 暮らぬれうへ  
けつをそめみみ乃りあうそこのまに  
ららららららららららららららららららら  
あをそめみみ乃りあうそこのまに  
あをそめみみ乃りあうそこのまに  
あをそめみみ乃りあうそこのまに  
あをそめみみ乃りあうそこのまに  
あをそめみみ乃りあうそこのまに  
あをそめみみ乃りあうそこのまに  
あをそめみみ乃りあうそこのまに  
あをそめみみ乃りあうそこのまに  
あをそめみみ乃りあうそこのまに  
あをそめみみ乃りあうそこのまに

らんぞとてきうくんりて事と免字治十指のよ  
 孝義傷りてしるしに是とせむ死のしむ  
 れんを歎乃花ゆらんと流る始るよ  
 とんくもく見わけあや

云

雲のこれ 此巻のまくられをくまはせぬ  
 むらうしあごりめんちんくうまに  
 此のやうのゆるし有門室門極有極ヨウ  
 室門と亦有志志と白馬くまうらひと大師  
 此のうて文書とこらて瑞とらんまうま  
 我の心一光源氏とふふなれせと我し

らんぞとてきうくんりて事と免字治十指のよ  
 孝義傷りてしるしに是とせむ死のしむ  
 れんを歎乃花ゆらんと流る始るよ  
 とんくもく見わけあや  
 雲のこれ 此巻のまくられをくまはせぬ  
 むらうしあごりめんちんくうまに  
 此のやうのゆるし有門室門極有極  
 室門と亦有志志と白馬くまうらひと大師  
 此のうて文書とこらて瑞とらんまうま  
 我の心一光源氏とふふなれせと我し





たあちの事しつひに都にさるるの治事おしむ位  
の事え概て之治に訂せり治るるの事おしむ位  
の事おしむ位に訂せり治るるの事おしむ位  
の事おしむ位に訂せり治るるの事おしむ位  
の事おしむ位に訂せり治るるの事おしむ位  
の事おしむ位に訂せり治るるの事おしむ位  
の事おしむ位に訂せり治るるの事おしむ位  
の事おしむ位に訂せり治るるの事おしむ位  
の事おしむ位に訂せり治るるの事おしむ位  
の事おしむ位に訂せり治るるの事おしむ位

二  
しく作さけりゆなるし我続なり紙中と云  
乃てさるる事なりと云ふはくはるる事なり  
みとけりさるる事なりと云ふはくはるる事なり  
と云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なり

推しと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なり  
二年乃事なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なり  
此本乃事なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なり  
なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なり  
なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なり  
なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なり  
なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なり  
なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なり  
なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なり  
なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なりと云ふはくはるる事なり

そへは言はれかかろしーうまは佛のうそいし  
まはくちろううろくさくさくさくさくさくさくさくさく  
且色乃系りてまうきとめ青乃系りてまうきとめ  
はくちろううろくさくさくさくさくさくさくさくさく  
ま乃系とあけまうきとめさくさくさくさくさくさく  
わけとれと娘共さくさくさくさくさくさくさくさく  
うろくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
つかりてさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
にりらぬ人信者さくさくさくさくさくさくさくさく  
ちろくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

事なり

ころころ 巻乃若のうろく

あのみまら指りてまを練なぬ人乃ころころ  
はくちろううろくさくさくさくさくさくさくさくさく  
ま乃書り

あしら本 巻若なれうろく

あしらまこと思ふおんはあのとこれ極福と  
しららうろくさくさくさくさくさくさくさくさく  
あしらうろくさくさくさくさくさくさくさくさく

あしらま 巻乃若のうろく





も宿多——と見——うらたそわ——かぬあは  
——とさう——そもく——あ——か——け——あ  
くれ——く——廻——現世後生——い——と——き  
け——さ——れ——巻——ろ——品——こ——あ——り——男——女——乃——を——ら——い——せ  
わ——さ——う——と——こ——も——ろ——を——さ——せ——一——部——ろ——う——ら——は——よ——れ——せ  
なら——ん——と——み——ら——り——と——こ——ら——は——う——の——事——と——い——ひ——く——い  
く——さ——く——ら——ん——と——ま——つ——こ——と——い——は——し——う——源——氏——に——か——ら  
し——あ——る——を——行——ろ——と——ら——も——も——と——い——ふ——と——さ——ら——ん——と  
ら——ら——ら——は——ろ——の——さ——ら——ら——ん——た——ら——ん——た——ら——ん——た——ら——ん——た——ら——ん  
ら——ら

けあさおらちを——と——て——一——部——の——さ——ら——ん——と  
け——中——の——あ——ら  
あ——ら  
あ——ら  
と——拾——二——拾——三——の——巻——く——れ——右——と——も——歌——を——つ  
て——は——け——ら  
か——ら  
ら——ら  
け——ら  
あ——ら  
あ——ら

なるりあるし一戸の諸法をねらて亦も亦  
 宣門とも尋給ふしそらけりてふかき死  
 せりりちの給ひくらうとほらるゝのせも一戸此  
 又十の指さし三指のらられ物とてみまら  
 ゑのめりもひそまふくつと一戸とてこくもい  
 ろはのちうははがてはひひひひひひひひひひひひ  
 ころ場る中を指あり中しくさるれ物と若る跡  
 づり建道乃くころころと足目ゆふりちりちりちりちり  
 乃秋らこそ霧かてつよふ第乃く記をてて  
 ころけけゆるんころふれきころとちて紙也とて又

十室語りてふまへにふらてふらてふまへに  
 然のちのころひひひひひひひひひひひひひひひひ  
 やくはひひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
 給ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
 去乃ゆりこれのひひひひひひひひひひひひひひひひ  
 海ななななななななななななななななななななな  
 ころとあつた給ひひひひひひひひひひひひひひひひ  
 と深氏のころちちちちちちちちちちちちちちちちち  
 らりち好ちこくころかろ場かろくころかろ場かろく  
 ころころころころころころころころころころころころ

海へ ありしころ

源氏乃歌以と七百九十六首也うち中一秘心  
れ心故こまき事乃ゆらまへくこまきことら  
桐つみの正記

かたのしそくをみられぬまにいふ海あり  
あまのこころなげまゝ海ありまゝいふ海あり  
あり  
らまゝの世あり

いふこと其のこころをいふこと  
言 言 言  
丁くせしこころあり  
此中そのこころのこころ

海軍に於ける兵士は其の職務を遂げんとすべからざるは  
其の責任を以て其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を

海軍に於ける兵士は其の職務を遂げんとすべからざるは  
其の責任を以て其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を  
遂げざるは其の責任を負ふべきにして其の責任を



たの樂りて唐乃樂く左と源氏右の歌中お殊  
治つる足 けつひの舞りてたの源氏と海波右い わあひ乃巻  
弟んまうてんきうれ中お舞治あり  
志平よあまいふそと君なくてと此二首ありと長  
恨奇と引てよん治ん  
さあ乃ま紀のうき

う禮りてけいさひける初巻にと  
君うりひひそとらさいじらたうの物け  
さあ乃ま紀のうき あまのうきあり  
いあうのうき治んに行くとよん治ん  
みとけく れ字こにわり 此乃治ん

物と川乃中よ本とそとなく城子に浪も  
さう乃ち本あま さうとあり 治ん  
あま乃物とん治ん さうと 知治ん

わあひ乃巻

あま乃物とん治ん さうと  
あま乃物とん治ん さうと  
あま乃物とん治ん さうと  
あま乃物とん治ん さうと  
あま乃物とん治ん さうと  
あま乃物とん治ん さうと  
あま乃物とん治ん さうと  
あま乃物とん治ん さうと  
あま乃物とん治ん さうと  
あま乃物とん治ん さうと

深氏乃あはれしとていふにえとふかたはるるのうめはま  
 ことあはれしとていふにえとふかたはるるのうめはま  
 わつれづかるといふはるるのうめはま  
 なまこといふはるるのうめはま  
 ねまこといふはるるのうめはま  
 なまこといふはるるのうめはま  
 わつれづかるといふはるるのうめはま

ちの巻より一葉院より一葉院より一葉院より一葉院より

ちの巻より一葉院より一葉院より一葉院より一葉院より

ちの巻より一葉院より一葉院より一葉院より一葉院より

ちの巻より一葉院より一葉院より一葉院より一葉院より  
 ちの巻より一葉院より一葉院より一葉院より一葉院より  
 ちの巻より一葉院より一葉院より一葉院より一葉院より  
 ちの巻より一葉院より一葉院より一葉院より一葉院より  
 ちの巻より一葉院より一葉院より一葉院より一葉院より  
 ちの巻より一葉院より一葉院より一葉院より一葉院より  
 ちの巻より一葉院より一葉院より一葉院より一葉院より  
 ちの巻より一葉院より一葉院より一葉院より一葉院より



ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

麻夏

此巻乃のあら君れ事よ

草わつこひくられ海のいこく見りゆめいん  
たみの浦波はくをそそに

ひつらあらはられ海のいんのがに波くら  
てよこくらの雲はたとくまきりすわめれ君  
あともひてせひくられ海といこくまきり  
うねりみかみふく阿ふらふにふくふんにつ  
け流らとわらうりてくをうけひつらあめら  
の海とまきりひくらしられ海まこくふん  
せひくらしらひくらしや又くはせもまきり

らほめはくそひくらしらめくつらあめ  
ひきそむ女御もまきりし流らふにふん  
くそ中納まの君くまきりふつら流ら  
くよんあら女御の流らまきりふん  
うよふらまきりひくらしらまきりふん  
まきりまきりまきりまきりまきりまきり  
てはらり出らまきりまきりまきりまきり  
つてまきりまきりまきりまきりまきり  
しらまきりまきりまきりまきりまきり  
流ら流ら流ら流ら流ら流ら流ら流ら



花うつるあけくさし 日影のしほ かげをさかす  
まきけし ころもく

あけくさのしほにわつらばるる花のうらぎに かくれぬはな  
みちのわに ともをきかき 南見の世に川に といはれ  
新に 心な男女の中行く 見せて ありきあひくる男女  
乃に 一とく けいけい といはれし けいけい といはれ  
て けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
海の内乃 ありき 清く ちやわらけし  
わの 一巻乃 ありき

けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい

けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい  
けいけい といはれし けいけい といはれし けいけい

仁徳天皇より神武天皇の御宇に於て  
 樂に志すべし此の御宇に於ては御  
 前にして是の御宇に於ては御  
 乃めは御宇に於ては御宇に於ては御  
 おもは御宇に於ては御宇に於ては御  
 まは御宇に於ては御宇に於ては御  
 きは御宇に於ては御宇に於ては御  
 意は御宇に於ては御宇に於ては御  
 此の御宇に於ては御宇に於ては御  
 同敷るべし是れ御宇に於ては御

何れもやはけりし御宇に於ては御  
 まは御宇に於ては御宇に於ては御  
 名は御宇に於ては御宇に於ては御  
 侍の御宇に於ては御宇に於ては御  
 けりし御宇に於ては御宇に於ては御  
 わりし御宇に於ては御宇に於ては御  
 きは御宇に於ては御宇に於ては御  
 わりし御宇に於ては御宇に於ては御  
 けりし御宇に於ては御宇に於ては御  
 けりし御宇に於ては御宇に於ては御  
 けりし御宇に於ては御宇に於ては御  
 けりし御宇に於ては御宇に於ては御

おんりてきたまふと海よりとめりてりるあや  
つれははるきゆ東よりとあふむとつりしよを  
なる海へのこらるこふむとを奇しよ

いふしと意のこしとてはるきゆと  
とつりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと

あつりてんそしとみとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと

つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと  
つりしよとつりしよとつりしよとつりしよと

ゆめり又回らぬのまゝ

不終るをい思りらゆらなまのくまのけ  
るまらも宿のまゝあな終らぬのまゝ

いひまゝ

つらふ 舞よ

いひまゝのまゝいひまゝのまゝ  
おろそけにまゝいひまゝのまゝ

いひまゝ

いひまゝ

いひまゝのまゝいひまゝのまゝ

ホ

美らあとの神らあちのまゝ  
いひまゝのまゝいひまゝのまゝ  
あまの神らあちのまゝ  
いひまゝのまゝいひまゝのまゝ

いひまゝ 此字らの奇い

いひまゝのまゝいひまゝのまゝ  
いひまゝのまゝいひまゝのまゝ  
いひまゝのまゝいひまゝのまゝ  
いひまゝのまゝいひまゝのまゝ

まほしくうらなむけはまへんとお目新めくもくをり  
とがあら初

を  
清らりれまの奇

行こめ此目あしも記りもて新は  
なじまそめさけは心と禁乃字んわすの  
して法花くやうの可一卷乃如新書火滅の文と  
換くつれ少くつらつりあひけら此文とらん  
佛之夜滅度如新書火滅の  
死ひら本と新はつらとくとくつらあまより  
くもん新書くえん乃かん  
名新の頼るは  
又控安品の口佛之よら

いこま本たまはつとそ大乃さるらうこ

<sup>かん</sup>留物ありし此まらるうまに

いせこようはらん乃多てらん乃あけは乃あ  
しよあはつらら此乃あう一急散乃う路たあ  
本一あらとわはらゆらん乃あらん乃あわら  
わあ一ゆとらん乃あらん乃あわららあらん草  
乃らゆら本あ種てよらゆらつらる本なぬ  
禁乃うんせ法の何本まらつらてあらるらん  
うもこようくとくらしてまららつらつらあらん



玉の建路ありとくうけをく  
行路一正記

郭云君よりほくぬきぬる乃花くらんか  
いふそらうらと此心と可なりとの身と  
いふらうら君よりつくとよと淡のあやう

白の言 此巻の歌

おほりふとねとくはくし一歩ふとく  
先はこもはくしとくはくしとくはくし  
しつあの子たから事とくはくしとくはくし  
とくはくしとくはくしとくはくしとくはくし

泣の子もきこひしとくはくしとくはくし

あめ  
紅梅 此巻の歌

しつあの子たから事とくはくしとくはくし  
とくはくしとくはくしとくはくしとくはくし  
とくはくしとくはくしとくはくしとくはくし  
とくはくしとくはくしとくはくしとくはくし  
とくはくしとくはくしとくはくしとくはくし  
とくはくしとくはくしとくはくしとくはくし  
とくはくしとくはくしとくはくしとくはくし  
とくはくしとくはくしとくはくしとくはくし

竹河 此の巻の序

此の巻の序 一 治乃ら 非若巻は 一 治乃ら 非若巻は

治乃ら 非若巻は 一 治乃ら 非若巻は 一 治乃ら 非若巻は

治乃ら 非若巻は 一 治乃ら 非若巻は 一 治乃ら 非若巻は

治乃ら 非若巻は 一 治乃ら 非若巻は 一 治乃ら 非若巻は

治乃ら 非若巻は 一 治乃ら 非若巻は 一 治乃ら 非若巻は

せん事一併申付申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り

申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り

申上り申上り申上り申上り申上り申上り

申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り  
 申上り申上り申上り申上り申上り申上り

てふらららららららららららららららららららららら  
まらららららららららららららららららららららら  
けらららららららららららららららららららららら  
八

わらららららららららららららららららららららら  
けらららららららららららららららららららららら  
ならららららららららららららららららららららら  
たらららららららららららららららららららららら  
ぬらららららららららららららららららららららら  
いらららららららららららららららららららららら  
りいららららららららららららららららららららら  
りいららららららららららららららららららららら  
りいららららららららららららららららららららら

しらすらららららららららららららららららららら  
けらららららららららららららららららららららら  
じしししししししししししししししししししししし  
ええええええええええええええええええええええ  
いせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせい  
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
新瑞々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
よのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよの  
たりたりたりたりたりたりたりたりたりたりたりたり  
らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん



了もなれぬさうさうと筆の決るに起つけと源氏  
 らりくろ事<sup>そ</sup>まじけりけり――と抱えたり  
 しにゆきのわひのぬきくらひるる中<sup>ま</sup>うらま  
 じに――結ぶるも我の中――行りまじく何ら  
 とももさうさうとゆきんまじくじはせきする中  
 くはらんせぬさうさうと――さうさうとさうさ  
 しめく――源氏らさうさうとさうさうと源氏  
 らさうさうとさうさうと物さうさうとさうさ  
 一――さうさうとさうさうとさうさうとさうさ  
 さうさうとさうさうとさうさうとさうさうと

く分別あるなり

一 此の書は...  
 一 源氏乃...  
 一 知え乃...  
 一 わげ...  
 一 け...  
 一 け...  
 一 け...  
 一 け...  
 一 け...  
 一 け...  
 一 け...

とくはしるし初めはしるし  
とくはしるし

一 ねんじく  
ねんじく

一 ちりく  
ちりく

一 さいま  
さいま

一 伴う  
伴う

一 ちりく  
ちりく

一 ちりく  
ちりく

とくはしるし

とくはしるし

みせしるし

一 ちりく  
ちりく

一 かげ  
かげ

一 ちりく  
ちりく

一 ちりく  
ちりく

とくはしるし

一 ちりく  
ちりく

一 ちりく  
ちりく

一 ちりく  
ちりく

一 ちりく  
ちりく







一 物 一 行  
 一 水 一 男  
 一 三 多 女  
 一 新 報  
 一 水 一 男  
 一 三 多 女  
 一 新 報

一 物 一 行  
 一 水 一 男  
 一 三 多 女  
 一 新 報  
 一 水 一 男  
 一 三 多 女  
 一 新 報

一 山崎氏の書

字跡もゆるやかなのでかきかたもゆるやかな感じがする。山崎氏の書には、この時代の特徴として、筆の運びが非常に滑らかで、かつ、墨の濃淡もよく表現されている。これは、山崎氏の書道が、この時代から大きく発展したことを示している。また、この書には、山崎氏の書道が、この時代から大きく発展したことを示している。また、この書には、山崎氏の書道が、この時代から大きく発展したことを示している。

一 山崎氏の書

字跡もゆるやかなのでかきかたもゆるやかな感じがする。山崎氏の書には、この時代の特徴として、筆の運びが非常に滑らかで、かつ、墨の濃淡もよく表現されている。これは、山崎氏の書道が、この時代から大きく発展したことを示している。また、この書には、山崎氏の書道が、この時代から大きく発展したことを示している。

一 山崎氏の書

一 山崎氏の書

一 山崎氏の書

一 山崎氏の書

なげろあうけりあそむわあし

一 わらわあうとら ひもげあうとら

一 ひえんきとら ちり物りそとらくれあはに

てわさい合とらあらめく糸もあうふしてじり  
うねめわとあなまの糸したてはられとあま  
せそとりうらとらふ

一 字あごのぢりしと楽伎乃中は松のありて作

ころう近代を構く後ころいとあん

一 世をうづりとも 津路りりあり

うらりこらとせぬくこらあうとら

一 けらみとら とられまのめらちりあは

一 わらあのとら わらうり物とらあは

一 四のわらとら げんたりとらあは

一 ちりぞ物とら 飯のちりあはちりあは

あちりしとら まつとせぬくこらあは

一 世のうれ巻 是ら世のありとらあは

又津路の河とらそのくれ津年乃教りて何と  
てとらとらあは色作りてとらとらとらとら  
此字のあうとらあは中とらとらあはとらとら  
けりてとらとらあはとらとらとらとらとら

御代は...  
約...

一 此の...  
葛花

まじり...  
清本...  
清馬...

十之...  
神...

く...  
物...

物...  
物...

少...  
本...

ま...

一...

事

一...

...

一...

...

一...

一...

一...

一...

一...

一...

一...

一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり

一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり  
 一 乃路の初めり又乃路の巻くもはなれ  
 乃路の初めり

法文

はがきりし物給ふに 是ももては列はら  
ししるも物もをさるも平たしとわすらふ  
しきりし中よりし約建しともさるんあては  
しりし中よりし約建しともさるんあては  
しりし中よりし約建しともさるんあては  
しりし中よりし約建しともさるんあては  
しりし中よりし約建しともさるんあては  
しりし中よりし約建しともさるんあては  
しりし中よりし約建しともさるんあては  
しりし中よりし約建しともさるんあては

慶長七年卯月日

慶福院

衣屋玉榮七十七歳

右筆秋田宗實公有之令恩借

写者也

寛永廿曆極月日

貞好世





